

ハイデルベルク信仰問答講解説教 5 4 「神に栄光を帰す」(2012年10月14日 礼拝説教)

【聖書箇所】

彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え／まだ語りかけている間に、聞き届ける。(イザヤ65:24)

わたしたち、つまり、わたしとシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣傳伝えた神の子イエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方においては「然り」だけが実現したのです。神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます。わたしたちとあなたがたをキリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いでくださったのは、神です。神はまた、わたしたちに証印を押して、保証としてわたしたちの心に“霊”を与えてくださいました。神を証人に立てて、命にかけて誓いますが、わたしがまだコリントに行かずにいるのは、あなたがたへの思いやりからです。(Ⅱコリント1:18-22)

【説教】

昨年の8月から続けてまいりましたハイデルベルク信仰問答による説教を本日で終了することになります。最後は主の祈りの締めくくりに言葉「国と力と栄え」とは限りなく汝のものなればなり」この頌栄の言葉と「アーメン」についてであります。ここはもちろん主の祈りの最後の言葉になりますが、同時にこの信仰問答全体の締めくくりとしても重要な問答であると思います。この最後のところから、今一度、この信仰問答の根底に流れている信仰を確認し、この講解説教を閉じたいと思います。

この主の祈りの最後は、福音書の中で主イエスが教えておられる主の祈りには見当たりません。幾つかの本には、二世紀に記された『ディダケー』(十二使徒の教訓)という文書の中にこの句が初めて出てくると言います。ですからこれは後の教会が付け加えたものと考えてよいと思います。でもだからあまり重要ではないということではなく、それはこの祈りに対する教会の告白として、この句が最後に付されたということです。ですからわたしたち教会に連なる者は、この最後の句を自らの信仰の表明として言い表す必要があります。

加えて、ローマカトリック教会では、主の祈りを「主祷文」と言いますが、この最後の句は付けられない形で主の祈りを祈ってきました。2000年に採択された主の祈りには付されていません。ということは、カトリック教会ではつい最近までこの最後の句を祈っていなかったということです。しかし宗教改革の時代に作られたハイデルベルク信仰問答ではしっかり最後の句まで問答で扱っています。それは宗教改革の教会がこの句を重んじたということではないでしょうか。ですからこの句はわたしたちプロテスタント教会が初代教会から受け継いで大切にしてきた信仰の姿勢なのです。

確かにカルヴァンも『ジュネーブ教会信仰問答』でこの句についての次のように述べています。「それはわれわれの祈りの基礎が、神に祈るために口を開く価値のないわれわれの中ではなく、むしろ神に、その能力と慈愛とにあることを、われわれに新しく記憶させるためであります」(問294)非常に改革者らしい言葉です。祈りの基礎はわたしたちではなく神さまにある。むしろわたしたちには祈るために口を開く価値もないと言います。でもそのわたしたちが祈ることができるのは、それは神さまの恵みです。だからその恵みを讃えて、神さまに栄光を帰す。それがこの最後の句の意味だと言うのです。

わたしたちの教会はこのカルヴァンの伝統にあります。カルヴァンがもっとも大切にすることが「神の栄光のみ」ということであります。ソリ・デオ・グロリア(ただ神にのみ栄光あれ)と言います。自分の栄光ではなく、神さまの栄光。その生き方に徹底した。彼は自分の墓を作ることさえ許さなかったと言います。もっとも質素に。その通り、彼の墓はただ小さな四角形の石の塊が置かれただけのものです。そこにおそらく弟子が掘っただろうと言われていて、「J C」(ジャン・カルヴァンのイニシャル)という文字が風化してうっすら読めるだけのもの

のになっています。自分の名も残そうとしない。それは自分の名ではなく「御名が崇められますように」という祈りの表れなのかもしれません。カルヴァンがここまで徹底しようとした意図は何でしょうか。

それは、ともすると神さまの栄光よりも、自分の栄光を讃えようとする人間の罪の傾向です。最後の句「国と力と栄え」これは何よりわたしたちが最も欲するものではないでしょうか。これを手にすれば怖いものは何もない。世の支配者たちは、これを一番求めるでしょう。国を強くし拡大し、そして自分の権力を誇示し、自分が賞賛を浴びること。今の政治家はそのようなことばかり考えているように思えてなりません。でも大なり小なりそういう思いは人間少なからず持つものであります。自分の家庭、友人関係、職場そういう小さな国でも、その国の中の権力者であろうとする。自分が一番でありたい。賞賛を受けたい。「国と力と栄え」の中心であろうとする。

ここであの主イエスが荒野で悪魔に試みられたことを思い起こします。主イエスは三つの誘惑を受けられます。一つ目は石をパンに変える誘惑、二つ目は神さまを試す誘惑、そして三つ目がこの世の繁栄ぶりを見せて、悪魔にひれ伏すならこれをあげようという誘惑です。この荒野の誘惑の話は三つの福音書が伝えています。その中でもルカ福音書は、この世の繁栄を与えようという誘惑についてこう記しています。(ルカ4:5-8)「この国々の一切の権力と繁栄」これが主の祈りで言う「国と力と栄え」に当たります。悪魔は言います。「それはわたしに任せられていて、これと思う人に与えることができる」興味深いのはこの「国と力と栄え」は悪魔の手であって、これを自由に悪魔は扱うのです。言葉を変えて言えば、この国と力と栄えを利用して、悪魔はわたしたちに迫ってくる。誘惑を仕掛けてくるのです。ですから、自分がそういう「国と力と栄え」の中心であろうとする時、それは悪魔の手の中に完全に墮ちているということです。

けれどもこの悪魔の誘惑に主イエスは打ち勝ってくださいました。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」そう言ってこの誘惑を退けられた。そしてこの「国と力と栄え」を悪魔の手から神さまのものとして取り戻し、確立してくださったのであります。この勝利のキリストによって、わたしたちも国と力と栄えをきちんと神さまにお返しすることができる。自分ではなく神さまに栄光を帰すのであります。それは神さまを信じることにしてもっとも重要なことではないでしょうか。主の祈りは最後にそのことをもって祈りを閉じるのです。

この信仰問答による説教で主の祈りのところを読み始めました時に、これは自分を手放す祈りだと申しました。すべてを自分のものにしてという思いから自由になる祈り。主の祈りはまず御名、御国、御心がなるように祈ります。その後自分たちの糧、赦し、誘惑からの救いを祈ります。その構造は、すべては神さまのものであって、それが正しく保たれている時に、

わたしたちもまた祝福され、必要を満たされ、すべての誘惑から守られるということを示します。これをいつまでも自分のものとしがみついている時に、わたしたちに平安はないのです。手放すことで得る。そこに信仰の新しい世界がある。

これはこのハイデルベルク信仰問答が初めから言っていることであります。第一問を読みましょう。ここにただ一つの慰めがある。それは自分をもキリストのものとして手放すこと。自分は自分のものではない。いくら自分のものであると思っても、自分の命を支配することはできません。神さまがこの命をご支配される。そして御子によってわたしたちを罪と死の支配、悪魔の支配から取り戻してくださった。すべての国と力と栄えの源となってくくださったのであります。

問128、わたしたちはそのすべての源である神さまに向かって祈るのです。すべてをご支配される神さまに向かって祈る。その神さまがすべての良きものを与えてくださると期待し、信じて疑わないのです。そこに平安があるのではないのでしょうか。子どもは親に依存します。でもそれが子どもにとって一番の安心なことです。そこに自分にとっての良きものがある。その中にある時に、子どもは平安であり落ち着いているのです。もしすべてを自分で確保しなくてはいけない。そういう環境に置かれたらどうでしょう。途端に子どもは不安定になるのです。神さまのもの、神の子であるときに、わたしたちは平安です。手放すことは得ること。神さまのものである時には、自分は自分らしく生きることができる。

さて、祈りの最後の言葉「アーメン」について触れて終わりにします。問129、わたくしはこれも宗教改革の言葉らしいなと思います。願っている自分よりもはるかに確実にこの祈りは神さまに聞かれているということです。この言葉の根拠となった御言葉イザヤ65：24「彼らと呼びかけるより先に、わたしは答え、まだ語りかけている間に、聞き届ける」おもしろい言葉です。自分が何を言おうとしているか、神さまは全部分かっているということ。でもそれは喜びではないのでしょうか。うまく言葉に言い表せなくても、全部分かってくれる。そういう人がいると安心します。神さまははるかに確実に自分を分かっている。自分よりも自分を分かっている。そこに祈りの確かさがあるのです。自分に先んじて祈りは祈りになる。つまり祈りを祈り足らしめているのは自分ではなく、自分よりもはるかに大きな存在、神さまによるということ。

祈る時、わたしたちの心につきまどっている一つの思いは、この祈りは果たして聞かれるかということです。神さまはわたしの祈りを聞いてくださるだろうか。だからわたしたちは神さまが聞いてくださるような祈りをしなければならぬと考える。熱心に、立派な言葉で祈らなくてはならない。でもどんなに言葉を並べても、熱心に祈っても、そういうことは何の意味もなくなってしまうほどに、はるかに神さまの方が確かにこの祈りを受け止めておられるということです。

なぜそういうことが言えるのか。今日読みましたコリントの信徒への手紙に(1：20)「この方」というのはイエス・キリストです。神さまの約束、それはわたしたちをお救いになるという旧約聖書から続く約束です。それはキリストにおいて成就しました。神さまの約束はこのキリストにおいて「然り」となったのです。このキリストに神さまの救いの確かさは現されています。

わたしたちがいくら立派な信仰者を気取ったところで、神さまの救いの確かさに比べれば意味がないのです。自分をよりどころとする信仰ほど危ういものはない。自分の熱心さ、行動。そういうものに頼っている信仰がいかほど不安定か。熱しやすく冷めやすい。わたしたちの信仰を支えているものはなんでしょう。自分でしょうか。

この信仰問答を読み始めて一年以上経ちましたが、この一年、わたしたちの中に本当に確かなものはあったでしょうか。自分の思いすらままならない。自分の存在すらままならない。わたくしも父の死を経験し、死を身近に感じました。この夏まで元

気にしていた。わたしが帰省すると車で迎えに来てくれた父はもういません。本当に儂い。自分が自分で立っていると考えることは何と傲慢なことか。

でもこんなにももろく儂いからこそ、神さまは御子をお与えになられた。そしてわたしたちを神さまのものとしてくださった。このようにもろいわたしたちを神さまが愛してくださったことが喜びなのです。そしてわたしではなく、その神さまにこそわたしの人生の確かさ、救いの確かさがあることが本当の喜びなのです。

問1生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答 わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。

アーメン。祈りをささげます。